

2001年 第10回 国際出版学会議
『21世紀国際出版環境の変化とその対応法案』
主催：社団法人 韓国出版学会

情報技術革命時代と東アジアの出版協力 - その必要性と協力方案の模索 -

金 勝 一 (Kim Seung II)

1. 序 言

今日の時代を称して「情報技術革命時代」あるいは「大分裂の時代」などよく言うが、このような言葉が示唆しているように、我々はいま市場化・情報化によって、国民国家・製造業・教養という伝統文化が分裂させられ、経営・就労・学習の意味が根本的に変化しつつある「知識資本主義の時代」を生きている。

このような時代の特徴は、いままで我々が生きる上での背景となってきた貨幣・土地・労働などの伝統資本に取って代わる新しい概念の資本として「知識」というものが登場したということである。このような知識資本主義時代の進展にともない、これから社会の諸現象は急速に変化していくであろうと予想される¹⁾。

これから展開される変化がまったく悪い方向への変質を意味しているわけではもちろんない。しかし、現時点で予想されている最も大きな問題点は、他ならぬ雇用の問題である。つまり主に知識を用いて創造的な経営を実現する新しい資本家の出現によって、過去のような巨大工場や労働者を必要としなくなっている。巨大な会社組織がなくなるということは、つまり多くの失業者が発生するということの意味する。またこのような現象は経済分野だけではなく、政治・文化・レジャーなどあらゆる方面で深刻な問題になるであろうと予想されている。しかもこのような知識資本主義時代を生きる上で絶対必要条件となる知識を共有している人が、全世界の約 3 割にすぎないという事実は、これから社会階層間（知識階層と非知識階層）の対立を招き、さらには人類社会を破局にまで至らしめる余地まで持っているといえる。したがって、このような人間固有の「働く権利」をこれからいかに解決すべきなのかという問題は、人類が

1) このような諸問題に関する具体的な説明は Alan Burton-Jones 著、野中郁次郎監訳『知識資本主義』日本経済新聞社、2001年、pp. 4-5 参照。

当面抱えている最大の問題であるといえる。同時にこれから人類は、過去の公理主義目標であった「最大多数の最大幸福」という目標から「最大多数の最小不幸」へと方向を変えなければならない²⁾。

そして今の時点で我々が特に注意すべきことは、経済・社会・技術・法制などの諸方面で優位に立っている欧米地域よりも東アジア地域で以上に指摘した問題による被害がより早く、より巨大な規模で現れる恐れがあるという事実である。

これは Huntington が言う「文明の衝突」という観点、つまり地域と地域の間での対立という見方ではなく、東アジアでの知識共有の差が欧米地域より大きいゆえに、そういった社会環境のなかでは、さもなければ知識を共有した者と共有していない者との間に衝突が起こり得るという観点を前提としている。この問題は文明時代以前にあった弱肉強食の性格と同類の問題で、上記した両者間の対立が招く結果について、我々はこれから深刻に取り組む必要がある。

したがって、このような知識共有がまだまだ完全ではない東アジア地域は、他地域でみられる自由貿易地域の設定などによる経済協力よりも、お互いが必要な知識を共有できる情報交流協力がより切実に要求される時点に来ているといえる。

そしてこのような情報交流協力は、古代から近代に至るまでの交流経験と伝統を持っている東アジア地域では、これからその経験を生かしていけば、いまの危機を充分克服できると考えられる。とりわけ世界の他地域よりも国民国家的性格が強く残っている東アジア地域の特性を勘案すれば、他の交流協力形態よりも情報と知識を中心とする交流と協力システムを構築するのが最も望ましいと考えられる。そのような過程で国民国家的性格も緩和されることとなり、ひいては時代が要求する問題に対して共同に対処できる方案も樹立できるであろう。

したがって、本稿ではこのような知識資本主義時代の現実状況がどの程度進行しているのかに関する考察を土台に、これからの社会の変化を予測してみることにする。そのうえで現時代に必要とされる情報と機能を知識化させる出版界の役割を検討し、そのための東アジア出版界の協力方式と方向を模索することを試みることにする。

2. IT 革命と現代社会の矛盾

20 世紀をふりかえてみると、戦争と革命の時代とも呼べる程人類史には多くの不幸や暗雲が低迷してきたわけだが、社会主義の失敗とグローバル化の進展によってそれらの暗い影はある程度払拭できたと思われる。一方、あらゆる精神的価値と物質的豊かさが大衆化され、いわば民主時代・平等主義時代を迎えることができたという点から見れば、20 世紀が成し遂げた業績は人類史において非常に肯定的な意味合いを持つであろう。このように 20 世紀の間に成し遂げた人類の業績は、それ以前の人類の歴史をすべて凝縮したのと同じくらい偉大な業績である。言い換えれば、20 世紀の間に人類が創り出したあらゆる文化と文明は、全人類史を通して創られたものよりもはるかに大きいといえるであろう。

2) 山崎正和『大分裂の時代』1998 年参照。

しかし、このような 20 世紀の偉大性というのも、情報技術革命をその基盤にしている 21 世紀の知識資本主義時代の到来とともに、さもなければ一瞬の錯覚や傲慢によりそのすべての業績を水泡に帰してしまう恐れがある。なぜならば、これからの時代は情報技術革命によって多種多様な情報が溢れ出すこととなり、一社会や一国家、もしくは全地球的な単一体機構が自らの将来と人類の未来を設計することはとうていできないくらい混乱が加重されると予想されるからである。それは 20 世紀という制限された情報技術環境の中でもファシズムやナチズム、社会主義などといった間違っただ歴史設計が生まれ、人類の平和共栄発展に膨大な被害をもたらしたという事実からも確認することができる。それがいまの情報技術革命時代の環境下では、自分でやろうとさえすれば何であっても、誰であってもできる、という可能性が拡張されているのである。このような時代の趨勢は全世界でより深化され、より加速されている。したがってこれらの情報がうまく統制・編集されず、不正確な知識が提供されるとすれば、もはや人間は果てしない混沌の世界に溺れることとなり、未来に対する計画や現状に対する対処策も見付けられず、さもなければ膨大な災難を迎えうるであろう。

このような傾向はすでに現れていた。つまり 4 年前から現在にいたるまで続いているアジア諸国の金融不安の源泉がどこにあったのか、その責任は誰にあるのか、それからその問題はいかに解決すべきなのかについて何の答えも出ていないという事実を想起してもらいたい。また、民主主義という美名の下で行われている覇権主義による弱小国の犠牲、むやみに流される情報に依存して行われている自由競争体制下で当然惹起されている不信と誘惑、資源と環境を考慮せず自分の利害関係だけを優先し利用する情報によって乱暴に行われている破壊行為などは、いまや人類に大災難の火花となっているのである。

もちろん情報技術革命が我々の未来に悪い影響だけをもたらすとは限らない。実際に我々が生活を営む上でたくさんの利便を提供しているのも事実である。最も代表的な例として携帯電話やインターネットをあげることができる。これらもたらした便利さはいままでどの発明よりも偉大なものとして我々に認知されている。そのような面から IT 革命は生活革命とも呼ばれているが、このような生活革命は今後も様々な方面でより多くの経済効果を生み出すであろうと期待されており、同時に人間の生活の質を根本から高めてくれると予想されている。

だからといって現水準における IT 革命が、情報でもって創造的知識を再生産し、既存の経済的行為や形態を根本から変革するということを意味してはいない。現在においてはただ既存のものをより便利にしているだけだという事実をまず承知しておくべきであろう。だが、たいがいの人間はこのような現象を大げさに捉えがちである。実際に我々のまわりにおいてこのような作業を成功的にこなしているのは極めて小数であるという事実には注意をはらう必要がある。

つまり、現在我々が情報技術革命社会を生活しているというが、伝統的な工業社会の価値観を通じて現在をみているゆえに、これから展開される社会形態については何一つ正しく理解していないのではないだろうか。たとえば、18 世紀半ばに起きた産業革命の初期時代を生きた人間は 21 世紀に生きている我々の変化 マイカーを運転し、インターネットを通じてあらゆる購買と業務を処理するなどといった は想像もつかないであろう。

したがって、我々がやるべきことは、これから現れる世界に対して予め備えること、それから新たな変化が訪れた際にそれに対応して戦える心構えを持つことであろう。具体的にいうと、伝統的に我々が固守してきた家族・社会・企業・国家などの共同体を、そのまま維持するためにはいかに対処すべきかを考え、また既に現れている知識資本主義が我々に要求している自由競争のなかで、我々はいかに自分の道徳性と価値観を守っていけるかという点を熟考し、対応しなければならない。

しかし、皮肉なのは我々が己のアイデンティティを維持することにおいて最も障害となっているのが情報技術革命そのものであるという事実である。つまり少し前まで我々が生きてきた工業社会では知識階層が殆どの情報を独占しており、一般の人々はただ中央のルートを通してのみ情報を収受することができたが、現在には一般大衆もあらゆる情報をマイクロプロセッサやインターネットを通していくらかでも享有できる時代となっており、さらにはその情報を自由自在に編集できる情報共有の時代を迎えており、情報吸収の主体である自分の意思によって自分なりの知識創出ができるようになったのである。このような見方からすれば現在の社会は非常に理想的に見えるかもしれない。しかし問題はあらゆる情報を検討し、分析し、自分にとって必要な知識へ編集できる能力を誰でも持っているわけではないという点である。これは一歩間違えればむしろ情報の被支配者にもなりうる。最近我々がよく耳にしている「離婚率急増」、「援助交際」、「婚外情事」、「ゲーム中毒」、「淫乱サイトの接続暴走」等々の諸社会現象は以上に指摘した問題を代弁している現象である。つまり、以上の現象というのは間違った情報の乱発とそういった情報の無分別な注入によって我々の社会が持っていた伝統文化・知識・幸福・道徳性・価値観が分裂させられていることを物語っている。

3. 情報認識の再定立と編集者の役割

このような視点から見た場合、現在の出版界は、情報の本質である信号とデータをいかに抽出し、抽出された情報をいかに編集し創造的知識へと転換させるか、そしていまの時代的要請に適合した編集者をいかに養成し、一般大衆を対象に編集に関する認識を再定立させるにはどうすれば良いのか、などといった問題に対して慎重に協議し、協力し合う時期に来ていると思われる。このような問題を解決するために、我々はまず情報と編集、知識に関して正確な認識を定立する必要がある。

人間の思考や行動および機械を利用して伝達される信号をデータというならば、これらのデータから自分に必要なもの、利用したいものを受け取ったのが情報であり、その情報を自分のものとして認識し、(他の情報をミックスさせ、新しい情報をつくり、認識したことも同様)、あるいはその情報を身に付け、熟成させ、機能化させることによって形成される、最初の情報とは異なる形の二次的情報・機能の集合体をいわば知識とすることができる。言い換えれば、これらのプロセスの主体が人間だとすれば、情報として提供された「素材」を脳が処理する(つまり考えたり、認識する)プロセスの中で創り出されたものを知識という。そして人間誰で

もこのような知識（真理を含む）にしたがって行動すれば、間違っただ行動や方向へ進まないという事実に接近させるのが編集者の役割である³⁾。

このように知識というのは単にデータによって作られるものではなく、編集者たちによって編集された正しい情報の提供によって、それを受け入れる個体の能力によって各様に創られるものである。言い換えれば情報の価値というのは受け入れる者の知識水準によって異なってくるということができる。

したがって、このようなプロセスを理解できない者はいくらデータを得るとしてもそれらを理解することができないゆえに、正しく情報を分別することができないだけでなく、自分に役立つ知識を創出することもできない。その結果、自分の欲求だけを満たす感覚的な情報のみを享有することとなり、最終的にはそのような情報に自分の人生までも投げ出してしまふのである。反面、与えられたある情報に対して、それと関連する知識を多く持っていればいるほど、自分に必要な情報だけを効率よく編集し、知識化することによって自分の人生をより豊かにすることができる。

このように、知識とは情報の編集を包括する概念である。言い換えると情報は知識の素材となると同時に創造的知識の拡大のための媒介手段であるといえる。従来の経済理論では情報と知識は区別されず同質のものとしてみなされてきたが、これからの知識資本主義時代で情報と知識は両方を補完するものではあるが、異質的な存在であるということを経験し、これらを適切に区分し、編集する能力を備える必要がある⁴⁾。

知識資本主義時代で知識とは貴重な経営資源であり、経済成長の原動力でもある。コンピュータや通信などどれだけ多くの補助的な手段が利用されるとしても、またどれだけ多くのデータによって情報が作られるとしても経済の主体は知識である。

以前の時代に比べれば現在我々は IT 革命によって情報を得ることや利用することがはるかに簡単になっている。しかし、これらの情報を多くの人々に知識化させるためには、多くの社会的システムと国家的次元での補完的措置が必要となってくる。だが、このような基本条件が全部揃えられるにはまだまだ時間がかかるであろう。これから当分の間は、データベースの基盤が不十分であることや、決済システムの未発達によって一般大衆は誰でも得られて誰でも接しやすい情報しか手に入れることができない。だから現在我々の周りには感覚的なデータを提供し、経済的利益だけを得ようとする商売としての情報が氾濫し、真の知識化のための努力はどんどん遠ざけられ、ただ社会的不安だけを惹起するような情報だけが溢れ出している。これがまさに現在起っている情報技術革命時代の姿なのである。

このような現象は出版分野でも頻繁にみられる。現在の IT 革命が出版史上どれだけ画期的な大事件であるにせよ、それはいままで人類文化を導いてきた印刷技術や文字の発明が遂げてきた貢献とはその質的な面で大きな差があるにもかかわらず、ただ便利さだけを評価し情報技術

3) B. Russell (1973), *An Inquiry into Meaning and True*, Harmondsworth: Penguin Books Ltd 参照。

4) G. N. von Tunzelmann (1995), *Technology and Industrial Progress: The Foundations of Economic Growth*, Aldershot; Edward Elgar Publishing 参照。

革命云々で出版界の問題をより大量生産しているのが現実である。その例として新刊のバブル、書店のバブル、返品が増大・水準以下の著作物量産等々を挙げることができる。このような全ての問題が他ならぬ IT 革命の産物なのである⁵⁾。

このような IT 革命の効果は現実的に我々の前に現れている。大手出版社の倒産と合併、そして人員の減員および賃金の低下、流通秩序の破壊など、既存の出版界秩序を崩壊させている⁶⁾。このような現象は IT 革命がたとえ創造的な人を雑務から解放させてくれるとしても大量の失業や不況を招く主犯となっているという事実を物語っている。現在の IT 革命とは、単に便利性を高める次元での革命に過ぎず、人間の思考までを変えうる真の革命にはまだ遙遠であると言わざるを得ない。

整理されず、編集されず洪水のごとく流される情報によって誘発される社会的問題は、どの民族でも創造的な人は 30% しかいないという現実世界では、人間の基本権利である「働く権利」までを奪っていくことによって、人間の尊厳性を破壊し得る水位まで至っているのである。

したがって、全ての情報は編集者（言論界、出版界）の仲介をなくしてそのまま流させてはいけないのである。このような意味から編集・出版はこれからもより重要な分野になると思われるし、このような分野で従事している者はより確固たる義務感や責任意識を持たなければならない。

上記したように情報を編集して真の知識を作るように助けることこそ未来の人類社会の可能性を高める大事な作業である。知識とは、新しい要素や情報を付け加えながら同質性を定立させることによって混乱を防止し、自分あるいは人類が進むべき方向を設定するものである。もしこのようなことが無視されるのであれば、それは社会の無秩序につながるのみである。しかし残念なのは実際我々の現実では後者の道を進んでいる傾向が強いという事実である。

このような現実で体系を備えた一冊の本を出版するということは、我々の未来に明るい光を差し与えることと同様の意味を持つ。したがって良書を編集・出版できる編集者および出版社の育成はこれからより大事に認識されるべきであり、ちなみに読書教育の重要性もまたより強調されるべきである。出版は 21 世紀の社会でより脚光を浴びることになると思われるし、同時ににより多くの市場開拓および国家間協力を通じた編集と出版のための協力が要求されているといえる。

4. 東アジアの出版協力方案

IT 革命のなかで現れた知識経済はこれから雇用問題を継続的に増大させると予想される。この問題を解決するためには、全人類の 70% といわれている創造的な能力を備えていない人々に対して、彼らの階層や能力に合う情報を編集、提供すべきである。それでこれらの編集された情報を通じて彼ら個人個人が社会の一構成員として参加できる知識を自らの力で形成できるよ

5) 小林一博 『出版大崩壊』イーストプレス、2001 年、pp.271-278.

6) 小林一博 『出版大崩壊』イーストプレス、2001 年、pp.117-142.

うに助けることが要求されると思われる。工業経済社会から知識資本主義時代へと転移する過程で起こり得るこのような雇用問題の被害を最小化させるためには、各階層別に必要な知識の受給が円滑に行われるように、そして質の高い情報の提供のために出版人による編集がより切実に要求されるであろう。同時にこのような情報編集に臨む人々の質的水準を高める支援プログラムをただ市場原理だけに任せておくのではなく、政府と民間が参加できる次元で企画すべきである。

もしこのような準備を予め整えておかないと、貧富の格差はより拡がり、雇用機会をめぐった非知識階層と知識階層の間の分化現象はより顕著になり、多くの社会問題を出現させると予想される。実際このような現象は既に現れているが、現在は知識資本時代の初期であるためその深刻さにまだ気付いていないだけである。したがってこのような問題に対する政府の介入が迅速かつ適切に行われなければならない。もしその時期を見逃したら政権が挑戦を受けるという最悪の事態まで招く恐れがある。したがって国が適切な時期に、適当な政策を樹立することは非常に重要である。しかし国の介入はできるだけ最小化しなければならない。国は市場で要求される道しるべとしての役割だけを充実することが大事であり、そうでないとむしろ逆効果を生み出す恐れがある。なぜならば知識資本主義社会は国境によって制約されない社会であるからである。つまり知識資本主義時代が要求しているのは国家的統制による国民国家的あるいは独占的パラダイムの経済運用ではなく、個人的であれ、団体的であれ、知性的で自給自足できる自立性が保障できる社会であり、また知識資本主義はそのような環境下でしか成長できないからである。

したがって、文明の衝突を起こすような、または民族主義的国粹主義を志向する政治勢力は、知識資本主義時代にはふさわしくない組織である。というのは、これからの社会には知識創造のために民族文化の多様性が必要であり、このような文化の多様性を相互共有できる普遍的な倫理観がより必要とされているからである。大企業であれ、小企業であれ、もしくは個人であるとしてもグローバル的な活躍が必要とされており、超国家的経営マインドが要求されている。それらを実現する方法は普遍的倫理と民族文化の多様性を両立させることである。

だが、グローバルな活動をするには現実的に多くの制約がある。強大国の覇権的統治スタイルやいまだ続いている人種差別、そしてあまりにも大きい経済的水準の差などがそれである。このような状況下でのグローバル化は結局弱者の犠牲をもたらすのみである。

したがって、未来の知識資本主義時代を生きるために、まず東アジア地域の協力と団結が必要である。そしてそのような協力のなかで最も大事なものは、出版界の協力である。なぜならば、出版界は知識資本主義時代の初期に最も必要とされる知識の大衆化を成し遂げるために、情報と機能の編集を行う主体であるからである。

それから出版界は出版に対するいままでの認識を変える必要がある。東アジア人の「最大多数最小不幸」のために、全ての人々に水準の高い情報を提供することによって、各々が知識の創造ができるような普遍的条件を出版界こそが設けなければならない。そのために次のようなことを東アジア出版界に提案したい。

第一、間違って編集された知識の汚染化を防止するための汎東アジア的出版編集研究機関を設置すべきである。この機関を通じて歴史・文化・経済・政治・法制などの諸方面に対するお互いの認識を一体化する作業が必要である。各国に関する歴史教科書を検討し、東アジア全体が共有できる歴史観を自国の教科書に載せることによって相互の理解を深めることはその一例である。こういった作業を通じて現在東アジアの協力を妨げている国民国家的性格を弱めることができるし、今後より実質的な東アジアの協力が可能となるであろう。

第二、出版市場の安定化および正常化のために電子出版と紙出版の虚と実を比較し、それに対する対策を講ずることによって、両者の矛盾を最小化し、その上で流通秩序の構築および自由市場体制を改善できる汎東アジア的協議体を設ける必要がある。このような協議体を通して相互に対する理解が深まることによって現在発生している出版界の問題点も解決することができるであろう。つまりこのような協議体を持つことによってこそ書店のバブル、新刊のバブル、返品連続、非情報公開による市場の不透明性、自転車操業的出版傾向などの問題を解決できる良い知恵が集められると思われる。

以上に述べたような出版界の流通問題は、たとえ現在においては各国の事情が異なりすぐには共同協議を通じた解決策の模索が難しいかもしれないが、実質的な対話を通してお互いの長所を受け入れ、それを自国の実情に合わせて取り入れていけば良い結果を得ることができるであろう。同時に自国内だけでの流通をより活発な著作権輸出を通じて解決していける契機をも作られると思われる。

第三、全東アジア地域の知識創造活力を高めるために、より多くの情報を提供するための著作権ローヤリティーを各国の実情にあわせて調節することも大事である。実際に著作権ローヤリティーが加えている出版への圧力は相当なものであり、とりわけ販売上不利な立場にある学術書籍の出版はとくに芳ばしくないのが現状である。これも著作権問題を協議できる協議機関を設けることによってよい合意点を探し、活発な翻訳作業が進行されると、お互いの知識を共有することができるので相互の理解も一層深められるし、さらには東アジア的価値観を創出するのにも非常に役立つと期待される。

第四、書籍交流を活性化させるために、まず各国で使われている公式の常用漢字だけでも統一させるのが大事である。文字に対する違和感をなくすことによって好奇心も湧いてくるだろうし、そこから購買欲も出てくるであろう。見慣れていない文字から感じる違和感のせいで外国の図書を度外視するケースが多いと言われている。そこで基本的な常用漢字だけでも統一されるとインターネットなどを利用するにおいても他のプログラムを使わないでどの国の国民ともより簡単に情報を共有することができるし、それは新しい知識創出へとつながると考えられる。

第五、知識資本主義時代を支えられる人材養成のための教育機関を設立すべきである。そのためには既存の教育機関を利用することも可能ではあるが、そのカリキュラムや指導方法、そして編集者という認識自体を変えるには伝統的な教育方法自体を変革させなければならない。そのための協議体を構成し、全般的な教育の枠を改めて協議し、同時に相互交流を通して人材養成を支援すべきである。実際に現在の編集者のなかには知識の創出ができない、情報の編集

力に欠けている者が多い。

第六、出版社と読書教育を奨励すべきである。出版社が育成されると編集者の雇用創出が増え、編集者がその役割を果たすことができる。ここで必要な出版社の形はいまのような伝統的な方法で本を出版する小規模出版社ではなく、知識資本主義時代の役割を果たすことの出来る知識コンテンツ会社のような出版社、多様な分野の知識を編集し、さらに時代に応じた新しい知識の創出ができる出版社を育成する必要がある。

そして、読書の普及を目標とする教育を実施し、読書の大衆化および底辺化を拡大させることによって「最大多数の最小不幸」という知識資本主義時代の社会的目標を充足させられる読書教育が必要である。そのための知恵もまた東アジア各国の出版界を通じて集めなければならない。

以上の六つの提案以外にも多様な現実問題を探し出し、東アジア出版界が相互協力すればこれから出版界はより発展できると思われる。同時に知識資本主義時代を先導していくという時代的使命感を持ち仕事をすることもできるであろう。

5. 結 論

コンピュータの登場は本の世界に膨大な衝撃を与えた。コンピュータが登場してすでに長い年月が過ぎたが、最近になってやっとコンピュータの威力を実感している。このような衝撃の中でいま出版界は従来の紙媒体の時代が終わるのではないかという危惧が蔓延している。しかし、これは急速に大衆化されたコンピュータの使用と、いまや手に持てる小さな携帯機械でコンピュータの代わりに利用できるというデジタル世界に対する驚きから返された衝撃であって、実際書籍市場での衝撃はそれほど大きいものではない。電子本が紙本を超える革命になると、世界の大手出版社が宣言したのが2000年8月、それ以来1年が過ぎた現在においても電子本の実質的な販売はまだまだ微々たるものであるという事実からもそれは確認できる。

このような面から考えると、出版革命が起こるにはこれからも随分と時間がかかるのではないと思われる。まるでそれは活版印刷が登場してから長い間写本文化が続いたという歴史的事実からも類推できることである。そして活版印刷がいまの本が持っているスタイルを根本的に変化させなかったように、これから現れると思われる出版革命が真の革命となるためにはもっと時間がかかるであろう。

しかし、今後電子本を活用できるほど携帯用端末機の技術が発展し、パーソナル・コンピュータやノートパソコン相当の容量を持つことになり、さらにそれが手ごろな値段となると、その時こそいまのような本のスタイルが根本から変わる本の革命が起こると思われる。このような革命はいまのような技術革新の趨勢だとそれほど遠くない未来に実現されると予想されている。

ただ新しい記憶装置が発明されるとしても本が持つ本来の意味つまり各種情報を編集して知識を提供するといった役割だけは変わることはないであろう。したがって編集者の役割も変わ

らず重要な役割として認識されるべきである。ただし流通上においては新しいシステムが登場するであろう。

このような新しい時代を迎え、東アジア出版界はお互いに協力し合い、新しい時代に適用できる知恵を収集し、人材を養成し、情報交換のためのシステムを備えなければならない。同時にこのような交流、協力を通じて東アジア的価値観を定立し、東アジア地域の新たなアイデンティティを形成し、それを基に現実世界の地域間対立および文明衝突のような覇権主義的西欧概念に代替できるように努めることによって未来世界に対する希望と安定を提供しなければならない。そのためにこの国際出版学会もいままでのように自国に関する出版問題をテーマにするよりは東アジア全体の出版問題に関心を持てるような発表と討論が行われることを願い、提案する次第である。

(筆者：東國大学教授 / 訳：文ヨン珠 (Moon Youn Ju))